

風疹・麻疹・トキソプラズマについて

今回は妊娠中に感染すると流産・早産や胎児に奇形などの問題が生じる可能性のある感染症についてお話しします。代表的な感染に風疹、麻疹、トキソプラズマ感染があります。

「風疹感染について」

胎児の器官形成期である妊娠初期に風疹に罹患すると、ウイルスが胎児に感染し高率(20-50%)に「先天性風疹症候群」を引き起こすことが分っております。「先天性風疹症候群」は以下のような症状を呈します。

心奇形(動脈管開存症・心房中隔欠損症・心室中隔欠損症など)

眼の異常(白内障・緑内障・小眼症・虹彩異常・網膜症など)

聴力障害

また、妊娠中期・後期の感染では、胎児の感染が生まれてからも持続し、新生児風疹となることがあります。

出血傾向(血小板が減少し皮下出血・消化器出血などを起こし、出血が止まりにくい状態)

肝・脾腫(肝臓や脾臓が腫れる状態)

骨の発達障害・精神発達遅延・脳性麻痺・骨髄炎など

風疹は一度感染すると終生免疫となり抗体を持ち続けると言われていましたが、年月が経つと抗体価が下がってしまうことがあるようです。また、風疹ワクチンを接種しても同じように風疹抗体価は低下してことがあります。風疹に感染せずにワクチンを接種した方も、風疹に対する抗体を持っているはずですが、できた抗体価が低いと消えてしまう場合があります。抗体を持っていれば、再度風疹ウイルスに感染しても軽症で終わり、胎児には影響が出ないとされています。しかし、抗体が無い方や抗体価が低い方が妊娠中に風疹ウイルスに感染した場合には上記のような異常が胎児、新生児に起こる可能性があります。

過去5年間の当院の調査によると、患者さんの約1/4の方の風疹抗体が無いか、低い値でした。特に35才を過ぎた方は1/3という結果でした。

以上を踏まえて、初診の段階で風疹抗体価の検査をお勧めします。更に、検査の結果風疹抗体価がない、あるいは低いと分った方にはワクチン接種をお勧めします。医師と相談して下さい。ワクチン接種後は2ヶ月間避妊する必要があります。ワクチン接種は当院で予約の上接種が可能です。

「麻疹感染について」

最近、麻疹(はしか)にかかった妊婦が早産や流産する症例が報告されています。また、妊婦自身も脳炎など重症化することも報告され、周産期医療の分野で大きな問題になっております。麻疹は、か

つては「ハシカの命定め」といわれるぐらいにこどもでの死亡率が高く、子供の病気の中でも最も恐ろしい病気のひとつでしたが、医療が進歩したため、麻疹で死亡することも少なくなり、さらにワクチンが実用化され、麻疹は今や過去の病気と思われがちです。しかし、数年前に大学生の間で集団で発生して休校騒ぎになったことは記憶に新しいと思います。国立感染症研究所の感染症情報センターによりますと麻疹の流行の見られる地域で成人の麻疹も増加しています。

麻疹は従来子供の病気とされてきましたが、子供の頃にワクチン接種を受けず、自然感染しないまま成人となれば、免疫をもたないまま妊娠することになります。

麻疹の予防接種は1978年に定期接種になり、現在では約9割の子供がワクチンを受けていたが、それ以前は任意接種であったため、約3割程度しかワクチンを受けていません。そして、この世代(年齢は32才以上)の妊娠が問題となります。

もし 妊婦が麻疹にかかるとどのような影響があるのでしょうか？

1988から91年にかけて、米国LAで局地的に麻疹が流行し、6614名の患者が発症しました。そのうち30%1980名が入院し、37名(0.6%)が死亡しました。症状は40度近い高熱と咳・鼻汁・結膜炎・咽頭痛・肝機能低下・白血球減少・血小板減少そして肺炎・脳炎・心筋炎などの重篤なものがあります。

その6,000名余りの患者の中に58名の妊婦がいました。麻疹流行とその対策58名の妊婦で麻疹が診断された妊娠週数をみると13週未満は23%、14-26週は35%、27週以後は43%でした。そのうち35名(60%)が入院しました。15名(25.9%)が肺炎になり、2名(3.4%)が死亡(中期1例、後期1例で1例は心筋炎)。

非妊婦での肺炎は9.8%、死亡率0.5%にくらべると、妊婦が麻疹にかかった場合、肺炎の発症は2.6倍、死亡率は6.4倍と高くなります。成人が麻疹にかかると子供に比べて重症化する事が知られていますが、妊婦では免疫能の低下のためにさらに重症化します。

3名の人工妊娠中絶を除き18名31%が流産(5名が流産、13名が早産)しました。これら流産した妊婦うち16例89%は発疹後2週以内に流産しています。この58例では先天性麻疹は見られていません。

妊婦が麻疹にかかると

- 妊婦が麻疹にかかると非妊娠女性に比べて重症化しやすい。
- 妊婦が麻疹にかかると流産しやすい
3割が流産し、しかも90%は母体発疹出現から2週以内に流産になります
- 妊娠中に麻疹に罹患した場合、風疹のように先天奇形を生じる率は低い。
- 抗体のない母親から生まれた新生児が1・2歳までに罹患すると重症化することが多い。
- 1978年前後に生まれた人のワクチン接種率が低いことがわかっています。

妊娠前に感染の既往や抗体の有無を確認し、免疫がなければワクチンを受けておくことで妊娠中の感染を防止できます。また、家族の既往歴を確認し、麻疹にかかったことのない人は早くにワクチンをうけ、

家族からの感染の危険を取り除いておくことが大切です。しかも、ワクチン接種者は罹患しても軽症で済みます。麻疹ワクチンは1歳から7歳までのあいだに接種する事になっていますが、この年齢に関係なく接種しても医学的には問題はありません。また麻疹抗体が陽性であってもワクチン接種をしても問題はありません。

「トキソプラズマ感染」

トキソプラズマは人畜共通感染症の一つで、妊婦さんが妊娠初期に感染すると胎児にも感染し**先天性トキソプラズマ症**(網脈絡膜炎、脳内石灰化、水頭症、肝脾腫など)になることが知られています。日本でも年間数百例の先天性トキソプラズマ症が発生すると推定されています。実際、近年、小児科領域で年間10例前後の顕性感染症例が報告されています。妊娠してから抗体価の検査をすることが多いのですが、抗体価が高かった場合に、いつの感染によるものなのか迷うことが時々あります。「妊娠前に調べていれば良かったのね!」と産科医がつぶやき、患者さんも困惑することがあります。妊娠前に抗体があることが分かっていたら、そのような混乱はなくなります。

感染経路はトキソプラズマに感染した猫や小鳥などのペットの糞を吸い込んだり、何らかの原因で口に入ってしまう感染するものと、加熱処理不十分な肉を食べること(馬刺、牛刺、鳥刺、レバ刺、鹿刺、加熱不十分なホルモン・羊肉・豚肉レアステーキなど)により感染するものが考えられます。

また、土の中にオシスト(トキソプラズマの卵と考えて下さい)が

潜んでいることがあり土をいじっている時に、舞い上がった埃を

吸い込んで感染することがあります。



大人は感染しても多くは無症状で経過し、後遺症を残さないため治療の対象にはなりません。妊娠中に母体が初めて感染すると胎児に感染することがあるので問題になります。

既に妊娠成立前に感染した方は抗体を作っていますので胎児に感染することは稀であります。



充分加熱
しましょう。

トキソプラズマの抗体価は採血でわかります。当院では初診時に検査をお勧めしています。